溫庭筠「商山早行」詩解釋考——詩語「槲葉」「枳花」を中心に——

鈴木拓也

はじめに

論者はこれまでに晩唐の代表的な詩人である李商隱と杜牧の作品からそれぞれ一首ずつ取り上げ、從來の解釋を踏まえつつ精讀を試み、論者なりの新たな解釋を提示してきた。[1] 本論文では同じく晩唐の詩人である溫庭筠の「商山早行」詩[2]を取り上げ、李商隱・杜牧の詩と同樣に精讀を試み、從來の解釋の補强や、論者なりに新たな解釋を提示したい。

本論で取り扱う「商山早行」詩は溫庭筠の代表作の一首に擧げられる、羈旅を詠った五言律詩である。いまその全體を提示したい。

01 晨起動征鐸　晨に起きて征鐸を動かし
02 客行悲故鄉　客行　故鄉を悲しむ
03 雞聲茅店月　雞聲　茅店の月

04 人 迹 板 橋 霜　人迹（じんせき）　板橋（ばんきょう）の霜

05 槲 葉 落 山 路　槲葉（こうよう）は山路に落ち

06 枳 花 明 驛 牆　枳花（きか）は驛牆（えきしょう）に明らかなり

07 因 思 杜 陵 夢　因りて思う　杜陵の夢

08 鳧 雁 滿 囘 塘　鳧雁（ふがん）　囘塘（かいとう）に滿つ

01 早朝に起き　馬車の鈴を鳴らし

02 旅行く者は故郷を離れ悲しむ

03 にわとりの聲、茅葺きの宿の上の名殘の月

04 人の足跡をのこす板橋の霜

05 カシワの葉が山道に散り落ち

06 カラタチの花が驛亭の垣根に鮮やかに咲いている

07 ふと思い出されるのは　昨夜見た故郷である杜陵の夢

08 夢の中では歸郷したカモやカリが池を埋め盡くしていたのだった

かつて住んでいた長安郊外の杜陵から南方へ向かう途中、商山の驛亭に宿泊し、早朝に出發する情景を詠んだ詩であり、その大意は非常に分かり易い。そのような詩が溫庭筠の代表作として評價される理由は、主に頷聯の素晴らしさによってである。頷聯に對する評價の最も古いものは『六一詩話』に引用された梅堯臣の言葉[3]である。

詩家雖率意、而造語亦難。若意新語工、得前人所未道者、斯爲善也。必能狀難寫之景、如在目前。含不盡之意、見

於言外、然後爲至矣。（中略）又若溫庭筠、「雞聲茅店月、人迹板橋霜」（中略）則道路辛苦、羈愁旅思、豈不見於言外乎。

詩家は意に率ふと雖も、而れども語を造ること亦た難し。若し意新しく語工にして、前人の未だ道はざる所の者を得れば、斯れ善しと爲すなり。必ず能く寫し難きの景を狀きては、目前に在るが如くし。盡きざるの意を含みては、言外に見はしめ、然る後に至りとなす。（中略）又た溫庭筠の、「雞聲茅店月、人迹板橋霜」の若きは（中略）則ち道路の辛苦、羈愁旅思、豈に言外に見はれざらんや。

梅堯臣が「商山早行」詩の頷聯を道中の苦しみや故郷への愁いなどが「言外」に現れ出た素晴らしい對句であると評して以降、頷聯に對する同樣の評價は枚擧に暇がないほどである。[4]

その一方、この詩全體の評價はどうかと言えば、それほど高い譯でも無く、特に後半の頸聯や尾聯に對して批判的な言說を確認することができる。例えば沈德潛[5]は「商山早行」詩を通して中晚唐の頸聯を次のように批判している。

中晚律詩、每於頸聯振不起、往往索然興盡。

中唐・晚唐の律詩は、頸聯が搖り動かないことにこだわるけれど、いつもハラハラと〈興〉が盡きてしまうのだ。

沈德潛によれば、頸聯は題材や話題などを轉じて詩に「興（味わい深さ）」を出すべきなのに、「商山早行」詩にはそれがないと言うのである。他にも顧安の『唐律消夏錄』[6]では詩の後半部を次のように批判している。

三四寫晨起光景、極妙。若五六自應說出「悲故鄉」意來、又寫閑景無謂。結句輕忽、亦與悲故鄉不合。「因思」二字、接五六耶。接三四耶。總之依稀彷彿而已。

三四句は早朝の光景を描いており、極めて巧妙である。もし五六句が自然と「故鄉を悲しむ」意を描き出しているのであれば、寂しい情景を再び描き出しているのでよくない。結句はいいかげんで、詩の大意である故鄉

を悲しむとも合わない。「因思」の二字は五六句を受けているのか。それとも三四句を受けているのか。とにかくぼんやりとしているだけだ。

この二者の批評に従えば、頸聯は佳句である「頷聯」と類似の表現をくり返すだけであって良くない對句ということになる。

ところが、近年の劉學鍇氏[7]は頸聯に對して好意的な批評、新たな解釋を試みている。

蓋此詩雖以「客行悲故鄉」起、以「因思杜陵夢」結、然全詩所表現之思想感情、竝不單純是「悲故鄉」(因思念故鄉而悲)。詩人之思想感情、隨早行行程之推進、所見所聞景物之變化、本身卽呈現爲動態發展之過程。當其晨起啓程、征鐸乍動之際、雖曾浮現「悲故鄉」之羈旅情思、然當其耳聞目接「雞聲茅店月、人迹板橋霜」之景象時、心中不僅有對此山野早行圖畫之新鮮感・愉悅感、且有一種對此特殊詩意美之美好體驗與感受、一種對詩意美新發現的審美愉悅。上述感受、對「悲故鄉」之情乃是一種緩解・沖淡與替代。此卽「含不盡之意、見於言外」之重要一端。(中略)至於全詩之不甚相稱、五六較爲平衍、七八與一二意複、自是微瑕、然如顧安之認定「悲故鄉」一端、以此責其「閑景無謂」、則出於對詩中所蘊含之感情過份簡單化理解。實則「槲葉」一聯已是「悲故鄉」之情緩解淡化後對途中景物心情較爲平和之欣賞、「明」字尤透出一種喜悅之情。

私が考えるに、この詩が「客行悲故鄉」の二句で始まり、「因思杜陵夢」の二句で結んでいたとしても、詩全體で表現している感情や思いは、決して「悲故鄉(故鄉を思い出して悲しくなる)」といった單純なものではない。詩人の感情や思いは、早朝からの旅程が進み、見聞きした景物の變化に隨って、それ自身が、動き發展する過程を現したのである。早朝に起きだし旅を初め、出立の鈴が鳴った時には、「悲故鄉(故鄉への悲しみ)」という旅情を思い浮かべたとしても、「雞聲茅店月、人迹板橋霜」という景色を見聞きした時、心の中には、

この野山の早朝の景色に對する新鮮さや愉悅感があったのであり、さらに、特別な詩の味わいに關して、美しくもすばらしい體驗や感得をしたこと、詩の興趣において、新しい審美觀を見出したことへの喜びがあるのだ。先に述べた新鮮さや愉悅感は、「悲故鄕」という感情を緩和し、取って代わったものなのである。これこそが「含不盡之意、見於言外（盡きない思いを含み、言葉の外に現れ出ている）」の重要な點なのである。（中略）この詩全體にふさわしくない點について述べれば、五六句はわりとバランスをとっているのに、七八句目が一二句目の意味と重複しているのが、微かな缺點である。そのため顧安は、二句目の「悲故鄕」という言葉から確信し、五六句目を「閑景無謂（閑かな情景でよくない）」というように批判する。しかしそれはこの詩の中に込められた感情をひどく單純化した理解から出たものである。實際の「槲葉」の一聯は「悲故鄕（故鄕への悲しみ）」という感情が已にやわらぎ淡くなった後、道中の景物に對し心情がやや落ち着いた狀態で鑑賞したものなのであり、句中の「明」字から喜びの情が最も透けて見えるのである。

劉氏は「明」字に注目し、頸聯には故鄕への悲しみが和らいだ後に目にした情景が描かれており、そこには旅の苦しみや故鄕への悲しみではなく、旅先で發見した、新しい詩の興趣に對する喜びが讀み取れると述べている。また、頸聯に對して新たな解釋を提示したにも關わらず、尾聯は從來通りに故鄕を悲しむ內容と解釋して、首聯の內容と重複していること、頸聯とのアンバランスを批判している。確かに劉氏のように頸聯を解釋すると、新しい詩の興趣を發見し喜んでいる者が、尾聯で再び故鄕への悲しみや望鄕の思いを抱くのは不自然であり、批判するのは當然のことである。

劉氏の頸聯に對する新たな解釋の缺點は、「明」一字だけを根據にしているため、論證が不十分である點である。頸聯に使用された他の語句を調査檢討することで、劉氏の解釋を補强すること、これが本論文の主な目的である。頸聯の語句のうち、五句目の「槲葉」と六句目の「枳花」はともに唐詩において多用されることのない詩語であるにも關わら

ず、他の注釋ではあまり詳しく説明されることはなかった。そこでこの二つの詩語が唐代においてどのように使用されたのかを整理する。その上で「商山早行」詩の用法と比較検討を行うこととする。

第一章　詩語「槲葉」の用法について

五句目「槲葉落山路」に描寫された「槲葉」について、劉氏は次のような注釋を附けている。

槲葉冬天存留在枝上，次年嫩芽發生時才脱落。春天正是槲葉脱落時。

「槲葉」は冬には留まり續け、次の年新芽が發生したときにやっと落ちる。春こそ「槲葉」が散り落ちる時期である。

通常の落葉樹は冬支度のため秋に散るものであるが、「槲葉」は他の落葉樹とは　異なり冬を越して春に新芽と變わる爲に散る植物らしい。變わった植生をもった「槲葉」であるにも關わらず、詩語となった場合、實は唐代において非常に用例が少ない。まずは秋冬の情景に描かれる、枯れ落ちない「槲葉」の用例を確認したい。

唐代の最も早い用例は司空曙の「雪二首　其二」[8]で確認することができる。

王屋南崖見洛城　　王屋　南崖　洛城を見
石龕松寺上方平　　石龕　松寺　方平を上る
半山槲葉當窗下　　半山の槲葉窗下に當つ
一夜曾聞雪打聲　　一夜　曾て聞く　雪の打聲

山の中腹に植わっている「槲葉」は、ちょうど窓の下あたりに見える高さにある。ある夜その「槲葉」を、雪の打つ音

が聞こえてきた。雪の降る冬の夜でも葉を廣げる「槲葉」は、雪の存在を聴覺によって表現するための道具として描かれる。

また李賀は「高平縣東私路」[9]で秋の景物として「槲葉」を描いている。

侵侵槲葉香　侵侵　槲葉香し
木花滯寒雨　木花に寒雨滯る
今夕山上秋　今夕　山上秋なり
永謝無人處　永く謝す　無人の處
石磎遠荒澀　石磎　遠くして荒澀
棠實懸辛苦　棠實懸りて辛苦
古者定幽尋　古者　定めて幽尋ならん
呼君作私路　呼君を呼びて私路と作す

高平縣の東にある私道には、「槲葉」が他の木々の葉を押しのけるように青々と茂って香っており、他の木々の花は「槲葉」に遮られながら咲いているのに、その花に寒々しい秋雨が溜まっている。秋になっても紅葉せず茂っている「槲葉」は、夕暮れ時の山道の薄暗さや寂しさを演出する一景物として描かれている。司空曙と李賀の詩に描かれた「槲葉」は、冬の夜や秋の夕暮れという寂しい時間帶、雪や雨が降る惡天候の中でも枯れ落ちることもなく生い茂る、植物として描寫される。

さらには溫庭筠も「盤石寺留別成公」[10]の中で晩秋の景物として「槲葉」を描いている。

槲葉蕭蕭帶葦風　槲葉　蕭蕭として葦風を帶び

寺前歸客別支公　寺前の歸客　支公と別る
三秋岸雪花初白　三秋の岸雪　花初めて白く
一夜林霜葉盡紅　一夜の林霜　葉盡く紅なり
山疊楚天雲壓塞　山疊なりて　楚天　雲　塞を壓ひ
浪遙吳苑水連空　浪遙かにして　吳苑　水　空に連なる
悠然旅榜頻迴首　悠然たる旅榜　頻りに首を迴すも
無復松窗半偈同　復た松窗　半偈　同じかる無し

「盤石寺」にて支遁と會った溫庭筠が寺を出ると、「槲葉」が川邊の葦を搖らした風によってザワザワと搖れている。ほかの木々は紅葉し盡くし、川邊に初雪も降った晩秋の夜、靑々と茂る「槲葉」は、「紅」や「白」といった鮮やかな色との對比をなしつつ、「蕭蕭」と搖れ動くことによって、知人と別れなければならない溫庭筠の寂しい胷中を描きだしている。これら三例により、秋冬の「槲葉」が枯れ落ちず夜の物寂しい情景の一景物として描かれることを確認した。

次に春の「槲葉」はどの樣に描寫されるのだろうか。まずは許渾の「將歸塗口宿鬱林寺道玄上人院二首　其二」[11]にその用例を見ることができる。

春尋採藥翁　春　採藥の翁を尋ね
歸路宿禪宮　歸路　禪宮に宿る
雲起客眠處　雲起りて　客の眠る處
月殘僧定中　月殘りて　僧の定める中
藤花深洞水　藤花　洞水に深く

槲葉滿山風　槲葉　山風に滿つ
清境不能住　清境　住む能はず
朝朝慚遠公　朝朝　遠公に慚ず

鬱林寺の道玄上人の院に宿泊した際に作られた詩である。七句目で「清境」と示すように、宿坊とした鬱林寺周邊の清らかで靜謐な早朝の情景が描かれている。五句目で「藤花」が散って水に沉んでいるのと對比するように「槲葉」は山からの風によって舞い散る樣子が描寫される。秋冬には茂る樣子で寂しさを感じさせた「槲葉」が、春には散ることによって、冬からの解放感や早朝の爽快感を描寫するようになっている。

溫庭筠には「商山早行」の他に、春景としての「槲葉」を描いた「送洛南李主簿[12]」という詩がある。

想君秦塞外　君を想う　秦塞の外
因見楚山青　因りて見る　楚山の青きを
槲葉曉迷路　槲葉　曉　路に迷はせ
枳花春滿庭　枳花　春　庭に滿つ
祿優仍侍膳　祿は優れて　仍りに侍膳し
官散得專經　官は散にして　專經を得
子敬懷愚谷　子敬　愚谷を懷ひ
歸心在翠屏　歸心　翠屏に在り

溫庭筠が李主簿という人物を見送った際の詩である。三句目に「槲葉」四句目に「枳花」を對句として用い、「商山早行」と非常に似た句作りになっており、「商山早行」の五句目・六句目を解釋するために重要な詩である。

この詩で「槲葉」は、早朝までには葉を落として爽やかな朝を演出し、落ちた葉は行くべき道を覆い隠してこれから旅人となる李主簿を迷わせている。さらに「枳花」は大いに花を咲かせて李主簿の眼を楽しませているのである。この二句は旅そのものへの不安や、旅先・任地での不安から生じる、故郷を離れたくないという悲しみから、足止めや眼を奪うことで現實逃避させる效果を持った描寫となっている。

頷聯でつらい現實から逃避できた結果、頸聯以降では、李主簿が愼ましくも滿たされてた故郷での隱居生活を思い出し、故郷を懷かしんで歸郷への思いを强める描寫となっている。頸聯には故郷での俸祿は父母をしばしば食事に伴うに十分であったこと、官が閑職であったおかげで經書の研究をすることができたことを思い出す描寫となっている。そして尾聯では李主簿を東晉の王獻之（字は子敬）に喩えつつ、隱居していた谷や翡翠の屏風のような故郷の山を思い出して歸郷への思いを强くしている描寫となっている。

これまでの調査檢討によって「槲葉」は、秋冬では散らない葉によって夜の物寂しい情景の一景物として描寫されてきたこと、春では葉が散ることによって早朝の爽やかで靜かな情景の一景物として描寫されてきたことを確認した。さらに溫庭筠の「送洛南李主簿」では、落ち葉に據って旅人の行き先を覆い隱し、足止めをする描寫もされていることが確認された。次章では「槲葉」と對になっている「枳花」の用法を確認したい。

第二章　詩語「枳花」の用法について

六句目「枳花明驛牆」の「枳花」について、劉氏は次のような語注を附けている。

枳、木名、似橘樹而小、莖上有刺、春開白花。至秋成實、果小、味酸苦不能食。（中略）庭院中常植枳樹作籬笆、

稱枳籬。

「枳」は木の名前で、橘に似ているが低木で、幹や枝には棘があり、春には白い花を咲かせる。秋になると實をつけるが、小さく酸っぱく苦いため食べられない。（中略）庭園に「枳」を植えてよく垣根を作ることがある。そのため「枳籬」と呼ばれる。

この語注によって、「枳」には幹の棘・白い花・不味い果實という三つの植物としての特徴と、生け垣を作る際によく使用される植物であることが分かる。

これらの特徴は唐代の多くの詩中で熟語として使用されているが、使用數にばらつきがある。ほとんどが「枳棘」に關するものであり、「枳花」と「枳實」については數例ずつあるのみである。この三つの詩語について、各々どの様な意味で使用しているのかを整理した上で、「枳花明驛牆」の「枳花」について考えることにしたい。

第一節　唐詩における「枳棘」と「枳實」

「枳棘」は『全唐詩』をもとに用例數を調査すると、十七例確認することができた。[13] その多くは鳥の住處として描かれている。孫逖の「和左衞武倉曹衞中對雨創韻贈右尉李騎曹」の十七句・十八句の對句には「枳棘鸞無歡　椅梧鳳必巢（枳棘　鸞は歡ぶこと無く　椅梧　鳳は必ず巢くう）」とあり、「鸞」や「鳳」のような大鳥は、棘のある「枳」に住むのを好まず、「椅梧」のような高木に巢を作ると描かれる。「枳棘」が大鳥の住むべき所でないという描寫は、常建「贈三侍御」の十三・十四句「孤鶴在枳棘　一枝非所安（孤鶴は枳棘に在れども　一枝は安ずる所に非ず）」にも表現されている。

「枳棘」は僻地に喩えられ、住むことを嫌う大鳥は君子であるにも關わらず僻地に行かねばならない人物に喩えられ

るようになる。劉長卿「送沈少府之任淮南」の一・二句「惜君滯南楚　枳棘徒棲鳳（君の南楚に滯るを惜しみ　枳棘徒だ鳳を棲わす）」では、淮南を「枳棘」に沈少府を「鳳」に喩え、淮南に向かう沈少府との別れを惜しむ描寫となっている。

また孟浩然「將適天臺留別臨安李主簿」の一・二句「枳棘君尙棲　匏瓜吾豈繫（枳棘　君は尙ほ棲み　匏瓜　吾は豈に繫がらんや）」では、臨安に留まる李主簿を「枳棘」に棲む「君」として、旅立たなければならない自己を、取り殘されていた無能な「匏瓜」として描寫する。

さらに李白「古風」其三十九の九・十句「梧桐巢燕雀　枳棘棲鴛鸞（梧桐は燕雀を巢くはしめ　枳棘は鴛鸞を棲はしむ）」とあり、「梧桐」は分不相應な燕や雀のような小鳥を棲まわせており、「枳棘」も不適當な「鴛」や「鸞」のような大鳥を棲まわせていると描寫する。以上の用例から「枳棘」は、君子が不本意に住む僻地や左遷地を喩える意味を持つことが確認できる。

次に「枳實」の用例についても整理したい。枳の實の實態は酸っぱく苦くて食べられないようだが、唐詩の詩語としての「枳實」は、漢方の藥劑として採取されたのが最初である。劉商「曲水寺枳實」[14]では、僧房の周りに植わっている枳から實を取る描寫が描かれている。

枳實遶僧房　枳實　僧房を遶り
攀枝置藥囊　枝を攀きて　藥囊に置く
洞庭山上橘　洞庭　山上の橘
霜落也應黃　霜落ちるや　應に黃なるべし

「枳實」は苦いながらも漢方になる有益な實として描寫されているようだが、次に擧げる白居易の「有木詩八首」其三[15]

の七・八句では、否定的な描寫で描かれている。

有木秋不凋　　木有りて秋に凋ちず
青青在江北　　青青として江北に在り
謂爲洞庭橘　　謂ひて洞庭の橘爲し
美人自移植　　美人　自ら移植す
上受顧盼恩　　上は顧盼の恩を受け
下勤澆溉力　　下は澆溉の力に勤む
實成乃是枳　　實成れども乃ち是れ枳なり
臭苦不堪食　　臭苦なりて食ふに堪えず

白居易は「枳實」をはっきりと食べられたものではないと言う。白居易は序で『漢書』の列傳を讀み、見た目は忠臣のように見えても奸臣であった張禹・江充・梁冀・王莽などを風刺する目的で「有木詩八首」を作ったと言う。「枳」も外見は「橘」のように美しいのに、「實」をつけたので食べてみれば、「橘」と違い食べられたものではない。人も外見だけでは判斷してはいけない喩えとして「枳實」を描く。

以上、「枳棘」も「枳實」も唐詩においては、あまり良い意味で用いられることがない。「枳棘」は君子が不本意ながらも住むことになってしまった僻地を喩える詩語であり、「枳實」は「橘」に似て見た目は美しいが中身が苦く食べられない、奸臣・佞臣の類を喩える詩語となっている。

それでは「商山早行」の六句「枳花明驛牆」に使用された「枳花」はどのような意味をもつ詩語なのだろうか。

第二節　唐詩における「枳花」

『全唐詩』において「枳花」は、「商山早行」詩の當該句を除くと四例を確認することができる。「枳花」を初めて詩語として使用したのは、朱慶餘の「商州王中丞留喫枳殼」[16]である。

方物就中名最遠　　方物は就中（なかんずく）　名は最も遠く
只應愈疾味偏佳　　只だ應に疾を愈すべくも　味は偏佳たり
若交盡乞人人與　　若の交り　盡く人人に乞ふか
采盡商山枳殼花　　采り盡す　商山　枳殼の花

「枳花」も實と同樣に病を治す藥劑として採取される。味は一風變わっているが美味しいようである。商山中の「枳花」を取り盡くすほどには。この詩における「枳花」には、誰かに喩えて批判したり、僻地に喩えて住むに相應しくない場所だと批判したりはしていない。

次に雍陶の「城西訪友人別墅」[17]と「寄襄陽章孝標」[18]を取り上げる。この二首は知人の別莊を訪れたり、相手の別莊の風景を想像しての描寫である。

澧水橋西小路斜　　澧水　橋西　小路　斜めたり
日高猶未到君家　　日高くして　猶ほ未だ　君の家に到らず
村園門巷多相似　　村園　門巷　相ひ似ること多し
處處春風枳殼花　　處處　春風　枳殼の花　　「城西訪友人別墅」

友人の別莊がある村では生け垣として「枳殼花」が植わっているのだろう、見た目は似ているし、春風に乘って「枳殼花」の香りがそこかしこから匂ってくる。のどかな田舍の春景の一つとして「枳殼花」は描かれる。

青油幕下白雲邊　青油の幕下　白雲の邊
日日空山夜夜泉　日日　空山　夜夜の泉
聞說小齋多野意　聞說（きくならく）　小齋　野意多し
枳花陰裏麝香眠　枳花の陰裏　麝香の眠り

「寄襄陽章孝標」

雍陶がこの詩を送った章孝標の別荘に、雍陶自身は行ったことがないようだ。しかし聞いた別荘の様子を想像して、「枳花」の香りとともに、その木陰から麝香の眠りを誘う匂いが漂う、野趣多めののどかな田舎の春景を描く。「枳花」は田舎の春景の一部として描かれるのであって、「枳棘」や「枳實」のような否定的な内容は讀み取れない。

そして既出の溫庭筠「送洛南李主簿」の四句目である。

想君秦塞外　君を想う　秦塞の外
因見楚山青　因りて見る　楚山の青きを
槲葉曉迷路　槲葉　曉　路に迷い
枳花春滿庭　枳花　春　庭に滿つ
祿優仍侍膳　祿は優れて　仍りに侍膳し
官散得專經　官は散にして　專經を得
子敬懷愚谷　子敬　愚谷を懷ひ
歸心在翠屏　歸心　翠屏に在り

「枳花」は大いに花を咲かせて旅に出なければならない李主簿の眼を樂しませているのである。そこにはやはり「枳棘」や「枳實」のような否定的な内容は讀み取れない。むしろその美しい花によって李主簿の眼を奪い、旅路や行き着いた

先での不安をかき消しているようである。三句目の「槲葉」によって旅程を覆い隠して旅人の足を止めさせ、四句目の「枳花」によって李主簿の眼を奪い、旅路や行き着いた先での不安から一時でも解放しているのである。

この「送洛南李主簿」頷聯の解釋を流用すれば、「商山早行」の頸聯「槲葉落山路　枳花明驛牆」も「槲葉」によって旅程を覆い隠して旅人である詩人の足を止めさせ、「枳花」によって詩人の眼を奪い、旅路や行き着いた先での不安から一時でも解放していることになる。つまりは劉氏が「明」字だけで解釋した「旅先で發見した詩の興趣に對する喜び」は誤った解釋ではないことを補強することができるのである。

おわりに

これまで、頸聯の「槲葉」「枳花」の用例を調査して劉氏の解釋の補強を行ってきた。最後に「商山早行」の解釋の違いを、分かり易く聯ごとにまとめたい。

01 晨起動征鐸　晨に起きて征鐸を動かし
02 客行悲故鄕　客行　故鄕を悲しむ
03 雞聲茅店月　鷄聲　茅店の月
04 人迹板橋霜　人迹　板橋の霜
05 槲葉落山路　槲葉は山路に落ち
06 枳花明驛牆　枳花は驛牆に明らかなり
07 因思杜陵夢　因りて思う　杜陵の夢

08　鳧　雁　滿　回　塘　　鳧雁（ふがん）　回塘（かいとう）に滿つ

01　早朝に起き　馬車の鈴を鳴らす

02　旅行く者は故郷を離れ悲しむ

03　にわとりの聲、茅葺きの宿の上の名殘の月

04　人の足跡をのこす板橋の霜

05　カシワの葉が山道に散り落ち

06　カラタチの花が驛亭の垣根に鮮やかに咲いている

07　ふと思い出されるのは　昨夜見た故郷である杜陵の夢

08　夢の中では歸郷したカモやカリが池を埋め盡くしていたのだった

まず從來の解釋である。

首聯　早朝に出發する樣子。故郷を離れる悲しみ

頷聯　早朝の張り詰めた情景（移動中）

頸聯　早朝の張り詰めた情景（移動中）

尾聯　昨夜に見た夢を思い出し、故郷を懷かしむ（首聯と同樣の想い）

この詩全體が首聯の「悲故郷」で貫かれた解釋となっており、尾聯の故郷の夢を思い出した「因（要因）」が不明確な解釋となっている。

次に劉氏の解釋である。

首聯　早朝に出發する樣子。故郷を離れる悲しみ

頷聯　早朝の張り詰めた情景（移動中）新たな詩の興趣に對する喜びを感じる
頸聯　早朝の張り詰めた情景（移動中）新たな詩の興趣に對する喜びを感じる
尾聯　昨夜に見た夢を思い出し、故郷を懐かしむ（首聯と同様の想い）

首聯で故郷を離れる悲しみを詠うが、頷聯・頸聯と道中の情景に新たな詩の興趣に對する喜びを感じ、悲しみが和らいでいるとする。その證據が「明」であるという。ただ、尾聯は從來と同様の解釋をしたため、尾聯が首聯と同様に故郷を悲しむ・懐かしむ内容でよくないと批判する。頷聯・頸聯で和らいだ悲しみに、尾聯でまた戻ることに不滿があったに違いない。

そこで、今回の調査を踏まえ劉氏の解釋を變更して、論者の解釋を提示したい。

首聯　早朝に出發する様子。故郷を離れる悲しみと漠然としている
頷聯　早朝の張り詰めた情景（移動中）漠然とした悲しみの繼續
頸聯　早朝の張り詰めた情景（停止）新たな詩の興趣に對する喜びを感じている
　落ち葉によって旅人の行く道を隠して足止めし花の鮮やかさで旅人の眼を奪っている
　旅人に心境の變化があり故郷を離れる漠然とした悲しみを一時忘れる
尾聯　故郷を離れる漠然とした悲しみを一時忘れられたことによって、昨夜に見た夢を鮮明に思い出し、故郷を懐かしむとともに、夢で見た水鳥のように無事に故郷に歸ろうと前向きな氣持ちに變わっている。

劉氏との差異は、頸聯を移動中の情景とは解釋しないことで頷聯との連動を切ったことである。更に頸聯の情景によって、漠然とした悲しみを忘れた詩人が、夢の内容を鮮明に思い出すことができたのである。そして最後には前向きな氣持ちに變わるのである。

劉氏は尾聯の内容が首聯と重複してよくないことを批判していた。これは頷聯までの詩人の心情と、尾聯での詩人の心情とに、微細な變化があることに氣づいていない爲に起きた誤った批判であったのである。

最後に本論考では詩語「槲葉」「枳花」の調査は唐代に留まるものとなってしまった。本來であれば、六朝時代の用例を調査することで、より深い考察ができたであろう。また、「商山早行」の頷聯の批評について調べると、高評價をする批評が多い中で、低評價をする批評があることを確認した。頷聯の評價が割れる理由はどこにあるのか、批評家の詩に對する考え方などを整理して比較することができるのではないかと思われる。

また、論者はこれまでの李商隱と杜牧の精讀を通じて、晩唐詩の特徴として虛字を詩中に效果的に用い、屈折した表現を驅使することを指摘した。本論文では詳しく觸れることはできなかったが、尾聯の「因」は「思」を修飾する副詞であり、虛字の一つと言ってよい。夢を思い出させる切っ掛けを表す語であるが、何によって夢を思い出したのかが明確でない爲に、尾聯の解釋が全體の解釋と合わなくなっていたように思われる。これも屈折した表現とするならば、虛字による屈折した表現技法は、やはり晩唐詩の特徴の一つと言えるのではないだろうか。今後も多くの晩唐詩を讀解することで、そのの特徴を明確にしたい。

注

(1) 拙論「李商隱「過鄭廣文舊居」詩にみえる自己認識—詩語「宋玉」のはたらきを中心に—」『漢學會誌』四十八號　二〇〇九年、及び「杜牧「贈別」詩其二解釋考—「還」字を中心に—」『漢學會誌』五十五號　二〇一六年を參照のこと。

(2) 原文は劉學鍇撰『溫庭筠全集校注』中華書局　二〇〇七年　六五〇～六五六頁に據っている。

(3) 『四庫全書』集部九　詩文評類に所收されている。

(4) 梅堯臣の他、頷聯の對句の巧みさを評價した者に、方回『瀛奎律髓』卷十四　晨朝類の「溫善賦、號爲八叉手而八韻成。以此知名於世、三四極佳。」
溫庭筠は詩文に巧みであり、八回手拍子のうちに八句を作ると呼ばれた。このことによって世の中に知られ、三四句は極めてすばらしい。
や、李維楨『唐詩雋』の「對語天然、結尤蒼老。（對句は天然だが、結句は最も使い古された表現である。）」などがある。

(5) 沈德潛『重訂唐詩別裁集』卷十二

(6) 原典未詳。劉學鍇撰『溫庭筠全集校注』中華書局　二〇〇七年に選評の一つとして收錄されている。

(7) 『溫庭筠全集校注』中華書局

(8) 『全唐詩』　中華書局　一九六〇年　卷二九三　九册　三三三三九頁

(9) 『昌谷集』曾益釋　世界書局　一九九一年　卷四

(10) 『溫庭筠全集校注』中華書局　二〇〇七年　七七二頁

(11) 『全唐詩』　中華書局　一九六〇年　卷五三〇　一六册　六〇五九頁

(12) 『溫庭筠全集校注』中華書局　二〇〇七年　六一七頁

(13) 『全唐詩』　中華書局　一九六〇年で「枳棘」を調査したところ、沈佺期「別侍御嚴凝」卷九十五　三册　一〇二二頁、孫逖「和左衛武倉曹衛中對雨創韻贈右尉李騎曹」卷一一八　四册　一一九六頁、儲光羲「鞏城東莊道中作」卷一三七　四册　一三九二頁、常建「贈三侍御」卷一四四　四册　一四五七頁、劉長卿「送沈少府之任淮南」卷一四九　五册　一五三三頁、孟浩然「將適天臺留別臨安李主簿」卷一五九　五册　一六二一頁、李白「古風」其三十九　卷一六一　五册　一六七九頁、高適「同廓十題楊主簿新廳」卷二一四　六册　二二四〇頁、杜甫「入衡州」卷二二三　七册　二三八四頁、王季友「雜詩」卷二五九　八册　二八八九頁、權德輿「酬李二十二兄主簿馬跡山見寄」卷三二一　十册　三六二一頁、韓愈「寄崔二十六立之」卷三四〇　十册　三八一八頁、柳宗元「同劉二十八院長述舊言懷感時書事奉寄澧州張員外使君五十二韻之作因其韻增至八十通贈二君子」卷三五一　十一册　三九二六頁、白居易「渭村退居寄禮部崔侍郎翰林錢舍人詩一百韻」卷四三八　一三册　四八六〇頁、李紳「新樓詩二十首」橘園　卷四八一　一册　五四七八頁、李紳「毘陵東山」卷四八二　一五册　五四八六頁、杜牧「昔事文皇帝三十二韻」卷五二一　一六册　五九六一頁の十七例を確認できた。

(14) 『全唐詩』　中華書局　一九六〇年　卷三〇四　十册　三四五八頁

(15) 『全唐詩』 中華書局 一九六〇年 卷四二五 十三冊 四六八七頁
(16) 『全唐詩』 中華書局 一九六〇年 卷五一五 十五卷 五八九二頁
(17) 『全唐詩』 中華書局 一九六〇年 卷五一八 十五冊 五九二四頁
(18) 『全唐詩』 中華書局 一九六〇年 卷五一八 十五冊 五九二五頁